

高畠高生の活躍



高畠高生が地元で活躍する人の思いを紡いだ冊子「高畠物語2」
 〓 同校

高畠町の高畠高（吉田晴美校長）で観光振興の授業を選択した3年生21人は、高畠で働く人々にインタビューして記事にし、冊子にまとめた。町職員や商店主、学校の先生など多様な人たちを取り上げ、それぞれの高畠に対する思いや宝物をつづっている。冊子には、高畠の魅力を次の世代へつなげたいとの生徒の思いが込められている。

高畠高生 働く人21人にインタビュー

冊子は、高畠で活躍するさまざまな人の視点から、地元の魅力に迫ることを目的に作成した。今回は2019年に次ぐ第2弾で、タイトルは「高畠物語2」とした。生徒がインタビューした21人分の記事が、写真付きで収録されている。加藤唯さん(18)は、浜田広介記念館で学芸員として働く古畑茉莉子さん取材した。埼玉真出身の古畑さんにとって、四季の美しさや人の温かさが高畠の魅力だと紹介。宝物として、来館者が思い出さずして石に絵を描く「ひろすけ小石」を挙げ、「思いのこもった小石が増えるたび、庭が鮮やかに彩られるのがすてき」とした。

教えてすてきな高畠

冊子第2弾 地元の良さ継承へ



「ひろすけ童話に触れて」
 古畑 茉莉子 さん

広介の愛と希望
 人の温かい思い

冊子「高畠物語2」の1ページ

佐藤陽さん(18)は、魚竹

商店で店主を務める竹田広幸さんにインタビューした。自慢商品の昆布巻きは

本校が開講する科目「観光振興」の授業を選択した3年次生21名が取り組んだ冊子「高畠物語2」が山形新聞に掲載されました。佐藤陽くん、加藤唯さんのコメントが紙面に紹介されています。

令和6年2月28日(水)「山形新聞」から

新型コロナウイルス禍でも地元の人から根強い人気があったことや、店の入り口にある看板が宝物であることを紹介。町の人口減を憂い、「町の良さを知ってもらうため、若者と協力してまちづくりをしたい」との思いを語っている。

加藤さんは「読んだ人に、高畠をもっと好きになってほしい」、佐藤さんは「取材を通して、地元愛が強くなった」と語った。冊子はA4判で28頁。330部を用意し、希望者は同校に連絡すれば入手できる。問い合わせは同校02368(58)5400。

(菊地健介)